

詩

部

門

佳
作

冬の陽射しのなか

毛
利
和
子

青い空の下の小径

群集のいない広場と鳩の面おも

駅の待合室の遠近

街角の榆の葉擦はずれの音

記憶に残るベンチの影

やがて

自他の境界も曖昧になり

ぼそぼそと

言葉になつていく

冬の陽射しのなか

わたしという現れは

言葉に触発され

しらしら

白白と

攫み所どころのない

みずいろのたまごを

産み始めた

佳
作

記憶の地図

記憶の地図を広げてみれば
一人の子どもが立ち上る

黒く煤けた高い梁

羽釜のふたから湯気がもれ
子供はかまちに腰かける

芒が揺れて松が鳴り

道祖さんには白い風

松ぼっくりがころげ落ち

池で騒ぐはかいつぶり

池
田
邦
子

光つてのびる廊下には
誰かを待ってるブランコが
しじまの中で止まってる

佳
作

絵
本

池
水
建
郎

断捨離を免れた絵本 寂し気に

本棚の片隅に横たわって眠っている

幼子を幾度となく

育んでくれた 絵本の数々

ふと 目に留まる一冊に

懐かしい思い出が蘇る

よちよち歩きの幼子が 好きな絵本を

引きずって おねだりが始まる

「これ これ」と

おぼつかない幼児語 溢れ出る

暫く立ち止まり きよろきよろ
様子を伺っている

いつもの膝が 指定席
お喋り交え 読み進む
膝の温もり相まって 眠気誘われ
いつしか 夢うつつ 沈黙が続く

膝椅子 動いて 目を覚まし

「つぎは つぎは」と

せがむ容姿が いじらしい

静かな声で 読み聞かせ やがて

幼子は 夢の中

絵本と並んで お昼寝へ

今 手元の絵本を 読み返えし
遠き日の息吹が 新たに 湧いてくる

早 半世紀 生きてきた幼子ら

とうに 大人の仲間入り

時折の仕種に その息吹 見え隠れ

親子の絆の懸け橋に なっていた絵本

古巣に戻った本棚で 新たな息吹を

包み込み 横になる

やがて 深い眠りに入っていく

ありがとう 数々の絵本に

佳
作

木の葉のお散歩

横断歩道を 一枚の木の葉
立ったまま 風に乗って
青信号を渡ってる

風圧バランス バッチリ
肩フリフリ
シュシュシュ シュシュシュ

こんな木の葉 初めて見たよ

風圧強く でんぐり返り

花
山
富久恵

クルクルクル　　クルクルクル

こんな木の葉　よく見るよ

そうそう　あの木の葉さん

目的地に　無事着いたかな？

佳
作

鍛える

朝起きて、まだねむい

ほほたたけば気合で起きる

頭がさえても体がだるい

建設体操をして体がおきる。

寒さが肌を刺そうとも

白い吐息を吐きながら、

児
玉
陸

片道2キロのさんぽ道

お昼頃には坂をあがり

私はジムにむかいます。

一日基一時間

体をいじめ、体を鍛え

体を鍛える、体を鍛える。

自分の周りはマツチヨだらけ

筋肉まみれのこのジムで

私も一つの筋肉になりたい。